



週報

●高野聖... ●大隈... ●山手... ●大隈... ●山手... ●大隈... ●山手... ●大隈... ●山手...

女子大學にて朗讀せられたる
夕氏の「ギタンチャリ」の一節
I had gone a-begging from door to door in the village path, when thy golden chariot appeared in the distance like a gorgeous dream and I wondered who was this King of all kings!

The chariot stopped where I stood. Thy glance fell on me and thou camest down with a smile. I felt that the luck of my life had come at last. Then of a sudden thou didst hold out thy right hand and say "What hast thou to give to me?" Ah, what a kingly jest was it to open thy palm to abeggar to beg! I was confused and stood undecided, and then from my wallet I slowly took out the least little grain of corn and gave it to thee. But how great my surprise when at the day's end I emptied my bag on the floor to find a least little grain of gold among the poor heap. I bitterly wept and wished that I had had the heart to give thee my all. (From Gitan joti)



△七ノノト
△一種の平和のタンゴ

△理化學研究所設立... △理化學研究所設立... △理化學研究所設立... △理化學研究所設立...

雜記帳

「家庭週報」(タテ34.5センチ×ヨコ24センチ。この紙面の下欄「雑記帳」にはタゴールの来校時の模様が記されており、上の枠内はその折タゴール自らが朗誦した詩とその訳。)

はじめに 1

まことこの詩人 3

講演「瞑想に就きて」と「めくらぶだうと虹」..... 11

賢治の初期童話とタゴール 44

「農民芸術概論綱要」私見 72

——タゴールの思想による一考察 107

王白測、その人とタゴール・賢治

タゴールと賢治 目次 44

——まことこの詩人の宗教と文学

『ギータンジャリ』の一つの詩と「四又の百合」……………118

タゴールの即興的短詩と賢治の初期童話……………141

「マリヴロンと少女」から「龍と詩人」へ……………169

「銀河鉄道の夜」の構想とタゴール……………195

『ウパニシャッド』二羽の鳥の比喩……………221

宮沢賢治における「芸術」の意味……………236

アンドリユーズ氏タゴールを語る……………254

——「学者アラムハラドの見た着物」をめぐって……………

「郵便局」を上演したコルチャック先生とタゴール・
賢治——その児童観と教育の実践とをめぐって……………277

参考(一)対照略年表……………311

参考(二)……………311

引用または参考にした書名……………314

所収論文初出一覧……………315

あとがき……………316

賢治の初期童話とタゴール

——「めくらぶだうと虹」を中心に

はじめに

童話作品「めくらぶだうと虹」は賢治のごく初期の創作で、作の年月は大正十年秋かとも言われているが、実際は未詳である。

実はこの作品は作者によって抹殺されているものである。というのは、七校の草稿そのままの上に赤インクで大幅な手入れが施され、題名も「マリヴロンと少女」に変えられてしまっているのである。従って作品として存在しないことになるので、この為であろうか、それとも他の理由からであろうか、この作品は従来ほとんど研究家の取り上げるところとはなっていないのである。

それにも拘らず、「めくらぶだうと虹」は私の見るところでは、内容と思想とが渾然とした珠玉の作品である。私だけでなく、賢治研究者として知られていた故恩田逸夫氏もその思想面に着目して、この作品には「賢治のものの考え方の根底が提示されている」と述べている。その「宮沢賢治の文学における『まこと』の意義」という論文は氏の代表的なものとして高く評価されているのであるが、鋭くことの真実に迫った好論であることには今も変りがない。ただ私は、氏が考察の根底においたヤスバース（二八八三—一九六九）の実存哲学の考え方な

く、タゴール（一八六一—一九四二）の言説を参考にすることによってその不備を補い、一層真実に迫ることが出来るのではないかと思う。この小論はその試みである。

注 副題「めくらぶだうと虹」を中心として観た四次元芸術の解明「昭30・10・15『跡見学園紀要』第二初出。昭56・10・27『宮沢賢治論』(1)「人と芸術」所収。内容——「まことの内容」、二「まことに至る方法」1「苦悩の徹底、実存への努力」、2「万人相通・自他不二」、三「自然観」、四「マリヴロンと少女への展開」、「結」。

—

先ず「めくらぶだうと虹」の内容をかいつまんで述べて置こう。

時は秋、城址の真中の小藪の中にめくらぶだうの実が虹の様な色で熟れている。夕方近くの通り雨の後に
出た虹に、めくらぶだうがたまらなくなつて声を掛けた。冬が来て腐つて死んでしまふ前に一度だけでも切
ない思いを伝えたかつたのである。その暗い表情を見た虹が優しくこれに応じて、宇宙の理法を丁寧に語
て聞かせる。めくらぶだうは終始熱心に耳を傾け、もつともつと教えてほしいと継るように言うが、間もな
く虹は消えてしまった。

このような筋で、ここでは省略するが、問答の部分を挟む前後の自然描写の詩的で美しいことは正に絶品である。

さて、虹の語りの部分がこの作品の眼目なのであるが、それは大きく二つの部分に分かれる。一つはめくらぶだうの死の不安を言う言葉を受けて、万物が絶えず変容するという理法を、眼前の夕方から夜へかけての空の色の変化、丘や野原の形状の休みない変化などに託して語る部分（A）、一つはこれを導入部として語られる宇宙の